

# 第一二一話

## 源頼信元服事付満慶木像事

『前太平記』上 卷第十八 三六九頁から三七一頁より

左馬権頭殿（頼光）の弟君である竹童子殿と申し上げた方は、天延二年に生まれ、今年十五歳に成られるので、元服させ頼信とお名づけになる。すぐに除目（巻）が行われ、口宣（式）をこしらえ下された。

無位源頼信朝臣

右の者は正六位下の左馬允であるとしよう。代々の忠臣、古くからの名家、ただ当時の力量があるだけでなく、なおかつ祖先の功績を感じさせる。この吉日に当たって、貴方は元服したことに加え、位と命を与える。位につき、君主の恩寵によつての繁栄を格別に行うがよい。前例に倣うのだ。

永延二年九月十八日

<原文>

無位源朝臣頼信

右可正六位下

左馬允。累代忠臣、曩日名家、非唯好当時之器量、且感父祖之先功。及此良辰、汝加首服、授爵命。宜用異寵榮。可依前件。主者施行。

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>）をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※

<書き下し文>

無位源朝臣頼信 右正六位下左馬允たるべし。累代の忠臣、曩日の名家、唯当時の器量を好んずるのみに非ず。且つ父祖の先功を感んず。此の良辰に及んで、汝に首服を加え、爵命を授く。宜しく用て異にすべし。前件に依るべし。主者施し行なへ。

この御祝賀としても、一族は残らず新田城に集まって宴を開かれる。

しかし近頃、伴別当が右馬允頼経を占って、頼経が暗殺されることを免れたという、その噂は隠されていなかったもので、すぐに別当をこの席にお招きして皆さんの運勢を御覧になると、色々なことがあった中で、頼信の人相を見て、「一生の間で、一度戦の遠征のために働きがあるだろう。しかも今までにない未曾有の誉れを示すだろう」と申し上げたが、案の定言った通りであった。また左馬権頭殿を占ったならば、「今から五日の内に喜ばしいことがあるだろう。もっと武勇の名声を天下に広め、末代までの手本となられるでしょう」と申し上げたところ、「ああなん

「あな薄情、

と、別当の媚の売り方。いやいやどうして、そのようなお喜びがあるだろうか。五

別当が追従や。

いざいざ何故にか、

さやうの御悦び有らんや。

日の内とはあまりに事が残りも遠くも無くて、事実とはならない申し事か」と軽ん

五日の中とは余りに事遠からで、

実しからぬ申し条や」と、

じる人もいたとかいう。

編する人も有りしとにや。

そうしているところで、盃を返す事数回の後、右馬頭<sup>(参)</sup>から皆さんに向かっておっしゃったことは、「そもそも我が一門はこのように繁栄を極めることは、祖父の六孫王（経基）が初めて姓を頂戴し、武臣に連なってからずっと、長年忠誠を尽くして皇居を守り、強敵を成敗し、治める国を穏やかに天下に徳で教えをお広めになることによって、一族は重要な役職を恐れ多くも賜り、代々天子の恵みに誇りを

一門重職を忝なふし、

累葉天恩に誇る。

持つ。これは全て厳父の入道殿（満仲）の功績によってのことである。それゆえ我ら一族、その分家の者は、これによって入道を敬わないならば一族の者ではないだろう。とりわけ天照大神が岩戸におこもりになる時、もったいなくもそのお姿を、八咫の神鏡に映し（この世に）お留めになったので、代々の天子はこの神鏡を御覧になって、その神がいらっしゃるようだとお思いになっている。これに倣って、僧侶、儒者は、皆孔子や昔の賢者の姿を、ある者は描き、ある者は彫刻して、後世の人はこれを信仰したので、その徳に報恩した。日本も中国もその方法は同じである。そうとなれば今厳父の像を彫り作って、当院に保存し、千年後、変わらず抜かない礼儀をつくし、一族の末流氏族の神を仰ぎ、その武の威光を末代に広めるだろうと思いますならば、皆さんどのようにお思いになりますか」と仰ったところ、居合わせた人々は、「確かに前々からそのように願い申し上げていることにございます」と同意した。満慶（満仲）はお聞きになり、「私自ら好んですべきことではないが、皆様がお望み申し上げることと言い、また他族の人に見せるべきもので

もないので、こっそり私がこれを彫ろう。だいたい色々な形があると言っても、降魔の形には及ばないだろう。先年この地を与えられたとき、住吉の神前で、竜馬に乗って、神鎧を撃った形を使おう」と言って、すぐにその日から彫り始めて、折々にこれをご彫刻になって、法華三昧院に祀り、今になるまで、弓箭の守護神として、その一族は申すに及ばず、他族の尊敬は深く、参り仰ぐ人々は、今になっても絶えない聖域である。

---

## 注釈

※尙・除目……大臣以外の官職を任命する行事。

※式・口宣……職事（宮中の事務を行う役人）が叙位・任官などの勅命を上卿（朝廷の行事などの責任者）に伝える文書。

※参・右馬頭……おそらくは頼光のこと。作者のミスか？

---

感想・指摘・叱咤激励、随時受け付けております。Twitter やメール等でご連絡ください m( )m

公開：2019/6/24

改訂：2021/3  
海熊童子